信毎俳壇

神野　紗希選

しやうさうゐんばくりやう灼眼の鳳凰
（小諸市）加藤　陽介

全身で秋風を聴く赤子かな
（千曲市）たじまたける

咲き残る芙蓉に小蜂集ひけり
（飯綱町）坂井　寿男

米櫃の底浚う音秋の暮
（岡谷市）吉池富貴勇

竜宮の使い登り来星月夜
（中野市）風間　陽介

あきちょうちょあめのにおいがしてきたら
（中野市）風間　一乃

コスモスの風に唇荒れ始む
（大町市）原田　勝

能面の天井仰ぐ秋思かな
（飯田市）大石　昭重

鳥帰る伯父はシベリヤ未還兵
（長野市）小林　明男

子等育て林檎育てし母の逝く
（長野市）清水美佐子

佳作

菊の香や末期の水を曾孫さす
（飯田市）原　哲夫

伊那谷の秋天跨ぐ飛行雲
（辰野町）粟津原吉弘

選評　一句目、秋の季語「正倉院曝涼」は、奈良東大寺の宝物の風入れの儀式。鳳凰の眼に宿る強い光が、時空を超え今を射る。二句目、赤子はただ転がっているだけではない。大人は鈍感で忘れてしまった世の無常を、全身でびりびりと受け止めているのだ。三句目、芙蓉と蜂、季節に取り残されたものたちが身を寄せ合って瞬間を生きる。四句目、生活の一局面に人生の深淵がのぞく。しみじみと晩秋。

坊城　俊樹選

K2に供華を放れと小鳥来ぬ
（千曲市）たじまたける

昭和の子木によじのぼり柿かじる
（佐久市）小林喜久男

秋深し兎に角母を抱きしめる
（長野市）中沢　義寿

残照に何を求むや秋の蝶
（佐久市）木内利一郎

竜渕に潜む岩陰露天風呂
（佐久市）西田　和彦

米作を止めると二人秋祭
（長野市）坂口　智弘

斉唱に稚の喃語や秋うらら
（南相木村）猿谷　秀

豊年や路地の風呂屋に招き猫
（長野市）荻原　宏祐

なまぐさき魑魅を祓ふ今日の月
（上田市）竹内　重美

虚子庵へ通りすがりの熟柿かな
（長野市）北沢　時江

佳作

この月を兵どもはどこで見る
（佐久市）町田ゆかり

秋風が背筋伸ばせと押して来る
（箕輪町）松沢　陸

選評　一句目、秋になると渡り鳥たちは北の国から日本にやって来る。K2で遭難した者へ供華を放れと催促する鳥のことか。信じられない程の情を感じた。二句目、私もまた昭和の子だが、いつも木登りをしていた。そして柿を採っていた。まったく私自身のような句。三句目、この情はよくわかる。深秋の頃の母と息子なのだろうか。そこにいるだけでも母を愛おしく感じる。

今井　聖選

落葉してあらはとなりぬ力瘤
（伊那市）中村　初治

生ハムに色なき風の塩加減
（松本市）伊藤　和夫

をさな子の卵むく手や星月夜
（佐久市）赤岡　厚子

アーケードとれ黄落の大欅
（佐久市）西田　和彦

浅間嶺に秋のほほずり始まれり
（千曲市）たじまたける

鶏小屋の裸電球雪催
（長野市）荻原　宏祐

きりぎりす跳べばかの日の羅生門
（長野市）武田　芳子

凍土にダイビングトライ決めにけり
（箕輪町）向山　政俊

落ちてより団栗自立始まれり
（須坂市）丸山　英子

伏せるれば時計進まぬ秋日和
（飯田市）吉沢　奨

佳作

天高し麒麟の首のしなやかさ
（長野市）宮沢　信博

鷺飛ぶを妻と見てゐる秋の暮
（飯綱町）坂井　寿男

選評　一句目、「力瘤」は山脈の比喩かもしれないし、肉体の一部かもしれない。落葉と力瘤の言葉の距離が「詩」を呼ぶ。二句目、生ハムの塩加減は秋風が付けたものだという大胆な発想。通念をはるかに脱している。三句目、おぼつかない手の動きに見入る視線が幼い命を慈しむ。四句目、アーケードが取れたのは商店街の衰退を表すが、そのおかげで黄落の大欅が視界に現れた。災い転じて福と為す。